

水への思い

Dear Water

後藤 顕之輔
Kennosuke Goto

EICA 名誉会員

仕事の内容として、“水”に携わってきたことを、嬉しく思っています。水は、人間の命の根幹であると、近頃よく考える。水を浄化する水道であるなら緩速濾過浄水場、生活水を浄化する下水道なら微生物処理、といった自然の摂理に基づいた施設に関係したことを嬉しく思うようになった。水の利用で言えば、農業用水に使われる江戸時代から存在する水車のように、水の力を利用し、揚水もすれば、動力として用い、お米を挽いたり、陶器用の土を挽いたり、自然に溶け込んだ人間臭さが良い。昨年秋の第29回EICAの研究発表会の見学会でご案内して戴いた、江戸時代から水をお城や人々の生活用水に利用した「辰巳用水」や、昭和6年に通水した「金沢市末浄水場」の、自然に溶け込んだ佇まいは、私の水人生の纏めとして、最高の思いをしました。

水の量はささやかであるが、山の中で出会った水については、感激した。天空の街と言われている南米のマチュピチュのお話を、清水先生（現EICA会長）の講演の中でお聞きし、その後、実際にこの眼で確認した時である。実は、数々の旅行パンフレットや紹介本に出てくる標高2,400mの空中都市に、人々の生活を感じることがなかった。グラハム・ハンコックの著書『神々の指紋』を読むと、「山、岩、樹木、石、そして水が少しずつ寄せ集められ、芸術作品を作り上げている。」と表現されているが、写真からは要塞を思わせるものである。ペルーのクスコからバスで約80km行き、アマゾン川の支流、ウルバンバ川を列車で2時間近く乗り、更に、バスで30分ほどの山の中にマチュピチュの遺跡はある。山道を登り、山の上からみた神殿や貴族王族の住まい、そして居住区を見ても人の影は感じられなかった。しかし、遺跡を巡り最後の頃、水汲み場を見た時、俄かに人の動きを感じた。そして、この水汲み場に導かれた僅か15cm程のしっかりとした水路に、少量ではあるが脈々と水が流れているのを見た時、景色は変わった。インディオ達が忙しく生活している様子が浮かんできた。その水路から真下に40段も続くと言われる段々畑にも、作物を造る百姓達の姿が浮かび上がってきた。水とは、人間そのものであると思われた。この水は1911年に、

この遺跡が発見されるまでの約500年も、そしてそれ以後、そして今後も脈々と流れ続けるだろう。



Photo 1 マチュピチュにて



Photo 2 水汲み場に続く水路

日本に降る雨は、多くの呼び名を持つ。日本起源の時代から稲造りをはじめ、雨を待つ農業を行い、人の命を繋いできた。農業用水は、雨から人を造る術ではないかと思う時がある。

日本と台湾の人の心を繋ぐ絆として現在に残る農業用水がある。戦前の日本が統治をしていた時代に建設された「烏山頭ダム」と「二峰圳ダム」、そして、この水によって潤った荒れた大地から変化した水田地帯である。八田与一氏の「烏山頭ダム」と荒地の開墾方式は、日本の水田に古来から用いられている、高い所から順に水を廻してゆく方法である。鳥居信平氏の

「二峰圳ダム」は、これまで利用されていなかった川底を流れている伏流水を堰き止めて、農業用水・生活用水として利用するものである。こうした自然の摂理に従った施設は、半永久的に残るものであって尊い。

春の4月から5月にかけて、関東から東北を北上すると、どこまでも広がる平野に、キラキラ光る水を張った水田に、稲の苗が植えられていく様は、本当に美しい。

私の手元に、EICA 発足の年、1991年のEICA NEWSのNo.1がある。この年の4月9日に九段会館で行われた総会で「EICA 環境システム計測制御自動化研究会」が産声をあげている。平岡先生が、1990年の第5回国際ワークショップが日本で開かれた時の運営委員会を繋げてきた経緯を、設立にあたって語っておられる。私がこのEICAの世界に入るきっかけとなったのは、1989年の10月26日・27日京都平安会館での「第3回水システム自動計測制御国内ワークショップ」であった。上下水道施設の電気設備の見積り業務にひたすら取り組んでいた私にとって、海外の水の薫りに触れた最初であった。

ちょうどこの頃、1988年のことでしたが、東京都の下水道局からのお話で、「SOFT プラン」という、下水道の管渠を利用して光ファイバーを張り巡らせて、新しい高度情報化システムを構築する検討会が始まっていました。この検討会以前には、電機メーカーの技術屋が環境の分野で一堂に会することはありませんでした。これより以前に、平岡先生の下で、津村先生を中心に、計装・水処理・焼却炉等のメーカーの技術屋が集まって、自動制御という切り口で研究されていました。上水道・下水道の世界でも、システムの最適制御の研究が盛んで、EICAは急激に、技術屋達の寄り処として機能したように思います。



Photo 3 EICA NEWS (No.1) 表紙 (平成3 (1991) 年7月発行)

こうした中で、1996年には、会の名称を「EICA 環境システム計測制御学会」と名乗りました。この段階では、当時の日本学術会議の学会は、工学分野では会員数500人が必要でした。これ以後、組織をあげて必死の努力をして、登録学術研究団体申請への活動を強化し、1998年には会員数を600人近くまで増やしました。1999 (平成11) 年9月14日付で、めでたく登録が実現しました。こうした努力も実り、EICAは、環境分野の中で産官学のバランスのとれた団体として、研究活動を通じて役割を果たしてきたと思います。

再来年、2020年には、EICAは設立30周年記念を迎えます。日本の上下水道施設は今後次々に、耐用年数を迎えます。持続可能な環境を維持するため、EICAの同志の皆様が、“うるおい”のある日本を創っていただきたい。